

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 23 日現在

機関番号：25201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23720270

研究課題名(和文) 留学生のキャリア形成における日本語学習の意義づけとその変容に関する研究

研究課題名(英文) Changing of International Students' Motivation for Japanese Language Learning through their Career development

研究代表者

小林 明子 (Kobayashi, Akiko)

島根県立大学・総合政策学部・講師

研究者番号：40548195

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円、(間接経費) 330,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は(1)留学生の日本語学習に対する動機づけの変容をキャリア形成との関連から明らかにすること(2)留学生のキャリア形成と日本語学習に対して異文化体験が及ぼす影響を分析することであった。日本で進学・就職する中国人留学生を対象に横断的・縦断的インタビューを行った。教職員に対する調査も実施し、就職支援や留学生の就職活動への取り組みについて聞いた。データは質的な分析方法により総合的に考察した。結果から、ボランティアやインターンシップ等、社会的責任を伴う形で日本社会に参画することにより、日本における将来像や職業像が描きやすくなり、日本語学習に対する動機づけが明確になりやすいことが示唆された。

研究成果の概要(英文)：The primary objective of this study is to investigate the changing process of international students' motivation for learning Japanese through their career development. The secondary objective is to examine the relation between international students' career development, motivation and cross-cultural experiences in Japan. Cross-sectional and longitudinal interviews were conducted for Chinese students who are planning to work or advance to postgraduate school in Japan. In addition, data was gathered from teachers and staff in the university using interviews. Qualitative methods were used to analyze the data holistically. The results showed that experiences such as part-time job or volunteer work where students have social responsibility contributed to their future self-images in Japan, and led to students creating a future-oriented motivation.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：日本語学習動機 キャリア形成 異文化接触

### 1. 研究開始当初の背景

第二言語の動機づけ研究では、伝統的に内発的動機づけが重視される傾向があり、外発的動機づけが学習に与える影響は否定的に捉えられてきた。しかし、国内の日本語学習者の多数を占める中国人留学生の場合、外発的動機づけの一種である「就職志向(日系企業への就職のため等)」が積極的な学習行動や高い成績を導くことが明らかになっている(小林, 2009)。これは、中国人留学生を採用する日本企業が増加しているという社会背景に加えて、留学生が将来の進路を考える青年期に位置していることに関連していると考えられる。従って、中国人留学生が持つ動機づけの特徴や動機づけに対する教育的介入の方法を検討するためには、外発的動機づけを進展させた概念として、彼らのキャリア形成に着目するという研究アプローチが有効である可能性がある。しかし、先行研究では、学習者が抱く自己の将来像が動機づけに影響することは指摘されているものの(羅, 2005)、学習者のキャリア形成の過程で日本語学習に対する意義づけがどのように変容し自律的な動機づけが形成されていくのか、そのプロセスと影響要因は十分に解明されていない。

また、これまでの調査では、学習者を取り巻く社会環境、人間関係が日本語学習に対する動機づけに影響していることが指摘されている(守谷, 2005)。しかし、そもそもこれまで日本語学習者を対象に動機づけの形成要因を探った研究自体が少なく、教育現場へ還元可能な具体的な知見の積み上げが十分ではない。中国人留学生が自らの進路を考え、将来像との関連から日本語学習に意義を見出していく際に、日本人や日本社会との接触経験がどのような影響を及ぼすのか、彼らが置かれた学習・教育環境の影響を包括的に検討した調査は見られず、この点についても実証的な研究が必要とされる。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は以下の2点であった。

(1) 中国人留学生の日本語学習に対する動機づけについて彼らのキャリア形成との関連から明らかにする。キャリア形成の過程で日本語学習に対する意義づけがどのように変容し、自律的な学習行動へ結びつくのか、そのプロセスと影響要因を解明し、動機づけへの介入方法を提案する。

(2) 学生が進路を考え日本語学習に取り組む際に、留学中の日本人・日本社会との接触経験がどのような影響を及ぼすのか分析する。これにより、異文化体験の教育的意義をキャリア形成の観点から考察する。

### 3. 研究の方法

本研究は以下の方法により実施した。

(1) 心理学、外国語(第二言語)教育、日本語教育分野における先行研究を概観し、動機づけ研究の動向をまとめたうえで本研究の立場と研究課題を示した。

(2) 将来日本で就職、進学を予定している中国人留学生を対象に半構造化インタビューを実施し、日本語学習に対する動機づけの変容過程と影響要因について全体的な傾向を明らかにした。

(3) 中国人留学生を対象に約2年半に渡る縦断調査を実施し、日本語学習に対する動機づけの発達過程と影響要因の個人差を探った。補足的なデータを得るために、留学生のゼミ担当教員、就職支援を行ったキャリアセンター職員に対するインタビューも実施し、専門科目の学習や就職活動への取り組みについても聞いた。

### 4. 研究成果

(1) 関連する分野の文献をレビューし、留学生の動機づけの発達過程と影響要因について知見をまとめた。これまで青年心理学の立場からは、大学生の学習に対する動機づけには、将来展望が関わっていることが指摘されてきた(速水, 1998; 溝上, 2008)。また、第二言語教育の観点からは、第二言語の「理想の自己(Ideal L2 Self)」と「理想とすべき自己(Ought-to L2 Self)」という動機づけの概念が提唱されている(Dörnyei, 2009)。Dörnyei (2009) は、学習者の理想の自己が「第二言語が話せる自分」だとすれば、現在の自己と「理想の自己」とのギャップを埋めようとする欲求が動機づけとして働くことと述べている。また、親や社会から期待される義務的な動機づけを「理想とすべき自己」と呼び、前述した「理想の自己」とともに学習に影響を与えると述べた(Dörnyei, 2009)。これまでの調査から、年齢の若い学習者と比較して、将来を意識する時期にある青年期の学習行動において、このような自己像を含んだ動機づけの影響がより大きいことが示されている(Kormos & Csizér, 2008)。したがって、青年期にある留学生の動機づけを理解するためには、授業に限定した動機づけのみではなく、自己像や将来像というより長期的な観点から考察することが必要であるといえる。しかし、先行研究を検討した結果、これまでの調査では「なぜ日本語を学習するのか」を問う研究や「授業においてどのように学習者を動機づけるのか」を問う研究は数多くあるものの、留学生を「青年期にある発達主体」(船木, 2003)として捉え「自らの生き方や人生との関連から日本語学習にどのように動機づけられているのか」を問う研究は少ないことが示された。

また、このような自己像や将来像と結び付いた動機づけには、周囲の人間との相互作用が大きな影響を与えることが指摘されてい

る(速水, 1998; 河先, 2006)。船木(2003)は、従来の留学生研究には一人の青年として留学生を見る視点が欠落していると述べ、留学生を日本人学生同様、対人関係やアイデンティティの模索という課題を抱える存在として理解する必要があることを指摘している。そして、第二言語習得や異文化適応等の問題を青年期の発達課題との関連から考察する必要があると述べている。

これらの先行研究から、留学生の動機づけの変容を考察する際には、日本人や日本社会との接触を通して、彼らの動機づけがどのように変容するのか、青年期の発達の文脈を考慮しながら解釈していく必要があることが示唆された。

(2) 上記の文献研究から得られた知見をもとに、動機づけの形成過程と影響要因について横断的に調査した。将来日本で就職、進学を予定している中国人留学生を対象に半構造化インタビューを実施した。中学、高校時代から現在までの人生について日本語学習との関わりを中心として、日本語を学び始めた理由とその後の動機づけの変化、留学を決めた理由、留学前と留学後の日本人、社会との接触経験、将来の進路とその理由、

現在の日本語学習に対する動機づけについて聞いた。得られたデータはすべて文字化し、質的なデータを分析する手段として修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(木下, 2007)を用いた。結果として、留学生の動機づけの変容には高学歴化や就職難という中国の社会状況や留学中の日本人との異文化接触が影響することが示された。とりわけ、大学や職場において日本人と同等の責任や役割を持つ存在として認められる経験をするのが将来日本で働く(大学院で学ぶ)自己をイメージすることにつながり、「日中2つの社会でキャリアを築くため」という未来志向の動機づけが形成されることが示された。

(3) 上記に加えて、日本語学習に対する動機づけの発達過程において、どのような個人差が見られるのか縦断調査により探ることとした。異なる進路を選んだ中国人留学生を対象として2年次から4年次の進路決定の時期までに複数回、半構造化インタビューを実施した。得られたデータを文字化したうえで時系列に沿って分析し、キャリア形成の過程における動機づけの変容を考察した。さらに、補足的なデータを得るために教職員に対するインタビューを実施した。教員には主に留学生の専門科目学習に対する態度や取り組み、日本人ゼミ生との関係、進路について聞いた。就職活動を支援したキャリアセンター職員には主に留学生の就職活動に対する態度や取り組み、留学生に対する就職支援について聞いた。教員へのインタビュー結果からは、調査対象となった留学生たち

が全員、専門科目においても日本語科目においても成績優秀であることが分かった。しかし、キャリアセンター職員や留学生本人に対する調査からは、進路決定や就職活動の面において留学生間で相違が見られることが示された。例えば、ある留学生は、大学の学業や日本語の成績に対する自信はあるものの、在学中に日本人との接触経験が少なく、日本での就職活動に積極的に取り組むことができていなかった。一方で、ある留学生は、サークルやアルバイト経験を通して、日本とともに働くことに対する自信を得て、将来の職業という観点から、日本語学習の目的がより明確になっていった。これらの事例から、学習者の動機づけの発達過程が多様であり、大学4年間の日本人や日本社会との接触経験の相違が日本語学習や日本で働くことに対する動機づけの相違を生んでいる可能性が示唆された。

調査結果から、留学生がキャリア形成の過程において、自己の将来像や職業像と照らし合わせて、現在の日本語学習を意義づけている様子が伺われた。櫻井(2009)は、高校時代から大学(大学院時代)を青年期中期と呼び、この時代は職業を選択し、社会人になる準備をする時期であると述べている。本調査の結果から、青年期の発達の文脈のなかで単なる教室での学習としてではなく「日本社会における将来像を形成するもの」として日本語が位置づけられていくことにより、より自律的な動機づけが形成されていくことが示された。

通常、教師は、日々の授業において「楽しさ」や「興味」として表れる状況的な動機づけに着目しがちであるが、教室外で学習者が何を考え、どのような人生を送っているのかにも視点を移すことにより、学習者に必要な日本語能力を長期的に考える必要がある。そして学習者が持つ将来像にとって、現在行っている教室活動がどのような意味を持っているのか、学習者の視点に立って振り返ることが求められる。

また、学習者が自己の人生や日本語学習の社会的意義を考えるうえで、大学のみではなく地域や職場における異文化接触が大きな役割を果たしていた。日本人のコミュニティにおいて一定の役割を果たす経験を積むことは、学習者の日本語学習に対する動機づけを高めるだけでなく、異文化社会で働く意欲という彼らの生涯にわたる動機づけを育む可能性がある。したがって教師には、留学生のキャリア形成という観点から在学中の多様な異文化接触機会を提供していくことが求められる。

今後は、調査手法として従来主流である横断調査に加えて縦断調査をさらに推進していく必要があると考える。動機づけの発達軌跡は学習者によって多様であり、また変化の時期や影響要因も異なっているため、学習者

一人ひとりの動機づけの発達プロセスと影響要因を詳細に検討する予定である。これにより、動機づけの発達メカニズムに関する分析結果を蓄積し、留学環境・日本語教育プログラムの改善のために実証的なデータを積み上げることができると考える。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

### [雑誌論文](計3件)

小林明子、中国人留学生の日本語学習に対する動機づけの形成過程 日本における将来像との関連から、異文化間教育、査読有、40号、2014、印刷中

小林明子、留学生のキャリア形成における日本語学習の動機づけとその変容に関する研究、平成23-25年度科学研究費補助金若手研究(B)研究成果報告書、査読無、2014、pp.1-51

Kobayashi, A. How do international students develop their motivation for learning Japanese by studying abroad in Japan? Stories of two young Chinese students. Proceeding of East Carolina University and The University of Shimane Joint Conference, 2013, 44-48

### [学会発表](計2件)

Kobayashi, A. Chinese students' motivation for learning Japanese, language identity, and cross-cultural experiences. Hawaii International Conference on Education 2013, January 7, 2013. Hilton Waikiki Beach Hotel, Honolulu, Hawaii.

小林明子・千葉朋美(2013)「中国の大学で学ぶ日本語学習者の動機づけを高める要因」2013年度日本語教育学会春季大会、立教大学、2013年5月26日。

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

小林 明子 (KOBAYASHI, Akiko)

島根県立大学・総合政策学部・講師

研究者番号：40548195